

22. ^{99m}Tc -diethyl IDA による肝胆道系シンチグラフィの臨床的検討

○筒井 一哉 佐藤 幸示
 (県立ガンセンター新潟・内)
 佐藤 均 服部 哲郎
 渡辺 清次 清水 克英
 (同・放)

3時間尿中排泄率が5%と少なく、胆汁排泄効率のよいと報告されている N, α -(2,6-diethyl-acetanilide)- iminodiacetic acid (^{99m}Tc -diethyl IDA) を使用する機会を得、臨床的検討を行なったので閉塞性黄疸の鑑別の可能性も含め報告した。

方法：空腹時仰臥位に位置した患者に大視野シンチカメラを指向し、肘静脈から ^{99m}Tc -diethyl IDA 1 mCi 静注し 5分ごとに連続60分間撮影した。

対象：コントロール群6例、肝外閉塞疾患群19例（胆のう胆道癌7例、胆道胆石症10例、ファターラ乳頭癌1例、胃癌胆管閉塞1例）、肝実質障害群7例（肝硬変3例、胆汁うっ滯型肝炎3例、脂肪肝1例）の計32例で検討した。なお、対比した肝機能はシンチ施行3日以内のものである。

結果：コントロール群のシンチ像は5分で肝へのとりこみとかすかな胃像が得られた。平均胆道出現時間は12.5分、胆のう14.2分、腸管排泄は38.3分であった。

胆道描出の有無、出現時間の遅延は、疾患による差ではなく、黄疸の程度と関係し、総ビリルビン値 10 mg/dl 以上の6例は全例胆道像は得られなかつた。最高 7.2 mg/dl 以下の黄疸のある6例は全例明瞭な胆道像が得られたが、出現時間が遅延していた。

肝内胆管の描出は、肝実質障害群、コントロール群には見られず、肝外閉塞疾患群に胆のう描出のないことと共に特徴的な所見であった。

胆管が描出されない総ビリルビン値 10 mg/dl 以上の症例を除外すると、肝外閉塞群では胆のう描出がなく肝内胆管の描出のあるもの15例中5例、胆のう描出がなく肝内胆管描出されないもの5例、

胆のう描出され肝内胆管描出されたもの2例、計15例中12例 (80%)。この両所見で肝実質障害群と鑑別できた。両所見のなかった3例はいずれも肝機能正常の silent stone であった。

23. 肝内占拠性病変に対する血液プールスキャニングの応用——肝血管腫の2症例

伊藤 和夫 篠原 正裕
 森田 穂 古館 正徳
 (北大・放)

肝コロイドスキャンは、肝内空間占拠性病変の存在診断法としては有効な検査方法として、広く臨床に使用されている。しかし、肝スキャン所見それ自体から、病変の質的診断を行なうには制限があり、かならずしも容易ではない。このような問題に対する核医学的方法として、 ^{67}Ga -citrate, ^{75}Se -メチオニン, ^{99m}Tc -HSA などによる複合 RI 検査法が利用されてきた。

症例は53歳と57歳の女性で、手術にて肝血管腫が確認された。肝スキャンは、1例は肝左葉の SOL を示し、他の1例は、肝右葉後区域に SOL 痘患を認めた。血管造影にて肝血管腫と診断され、ECHO, CT などにて central necrosis を伴う充実性腫瘍と診断された。肝血管腫の診断から、血液プールスキャンが有効と考え、 ^{99m}Tc 生体内標識赤血球による肝 RI-アンジオグラフィーと血液プールスキャンが施行された。

両症例とも、肝 RI-アンジオグラフィーならびに血液プールスキャンは共通の所見を示し、肝血管腫に対して、血液プールスキャンの有効なことを示唆した。所見は、動脈相にて腫瘍周囲の vascularity と腫瘍内に点状の vascularity 像を認め、1分像では、腫瘍周囲に軽度の RI 増強所見を認めた。血液プールスキャン (40分像) は、非常に特徴的所見を示し、肝スキャンの SOL に一致して強いドーナツ状 RI 集積像が示された。

肝血管腫は、頻度的に多い疾患ではないが、良性肝内腫瘍としては比較的多く、また、病理学的